

勿論、さういふ新語にしても、すべてが否定せられるわけのものではない。それが一種の社會的生存力を持つものであつたなら、人々の心の中に浸透して行つて、有力な存在を示すやうにもなるであらう。併し、たとへ、相當世に行はれ、存在の力を持つてゐる言葉にしても、右のやうな性質の新語は、やはり検討が加へられなければならないのである。

たとへば、外國から新しい事物が入つて來たとする。その事物には、勿論、原語の名稱が附いてゐるに違ひない。ところが、わが國では、この原語の名稱を直ちに採り用ひることをしないで、これに適當な譯語を與へようとする。この場合、その譯語を選ぶのに、むづかしい漢字の語を、いろいろ考へて、實體とは別に、たゞ漢字だけに捉はれて、新語を造り出すといふことになれば、それは必ずしも新語として肯定せられるものにはならないのである。何となれば、それは實體と遊離して、むしろ漢字を弄んだ結果に陥る場合が少からず見受けられるからである。それで、その實體に最も直接的であるといふ意味から云へば、むしろ原語を、そのままに用ひた方がよいといふことも云はれるのである。たゞこの場合、原語が日本人の國語の性質に適しないことが多いから、これに適當な變化を加へることは、勿論であるが、とにかく、原語に則した新語を用ひる方が、却つて良

いのではないかと思ふ。

尤も、これは、その語が、大體において、弘く世界に共通するものと認められた場合、或は特に、そのものの權威が、その語と密接な關係において認められる場合に限ることで、さうでないときは、適當な譯を與へるのは然るべきことであらう。たとへば、地下鐵のごとき、諸外國で一々名稱が違つてゐるから、わが國では、アメリカ式の、サブウェイといふやうな名稱を取らずに、地下鐵といふ名を與へたのは肯定せられてよいのである。映畫といふ語も原語では、シネマ、キネマ、ムービー、又近頃ではトーキーなどともいふので、これを總稱して、映畫といふやうな語を用ひることになつたのは、やはり肯定せられてよいと思ふ。その意味からいふと、エレベーターのごときも、一方では、リフトなども稱する語があるから、わが國では、昇降機と云つたやうな言葉を一般化した方が適當であるといふことも云はれるであらう。

併し、一般的には、ポットとか、パーマネントとか、既に身についた言葉を、端艇といふむづかしい漢字で現したり、電髪か淑髪とかといふ物々しい言葉で表現する必要はなく、むしろこれらは、實體と離れた言葉に捉はれたものといふべきである。即ち、端艇とは、支那に昔からあつた言葉で

あるが、それは今日のポートルースなどに用ひられるポルト、或はレガツクと違ふものであるから、ポルトを端艇といふ漢字で現すのは、實體に相應しないものである。又、パーマネントウェーブを電髪或は淑髪と稱したのは、この洋髪に對する非難から逃避しようとする氣持も多分に手傳つて、新語が案出せられたと思はれる點もあるから、これは、パーマネントの實體と新語とが、遊離した感じを與へるところに、むしろ逆効果をねらつたものといふことが出来る。併しもとより、パーマネントといふ實體そのものを不可とするなら、この風習を否定するのでなければ、いくらパーマネントといふ言葉のみを否定しても、何にもならないのであつて、實體がなくなれば、言葉も自然に社會的存在を抹殺される。言葉のみの抹殺は、何の効果もないことである。

新語の在り方

次に、新語が存在するやうになつた結果について、即ち新語の狀態そのものについても、いろいろ考へて見なければならぬのである。

第一に、その新語が、正確な意義、内容を持つものであるかどうか考へられる必要がある。學術上の用語などにおいては、殊に然りである。混沌とした、朦朧とした、むづかしい漢字による表現

などはこの點からも考へるものと思ふ。一面において、それは實體と遊離した語になる懼れがあるからである。近頃まで機械化部隊などと云はれてゐた語が、機甲部隊といふやうな新語で表現せられた場合、前者の機械化の化といふ語に一抹の曖昧さがあつたのに對して、機甲といふ語の方が、裝甲自動車といふやうな語と照し合せて、より一層正確な表現であるといふことも云はれるであらう。一方、それは以下に述べる言語の簡明化といふ方針にもかなつてゐるのである。

哲學上の言葉でも、ドイツ語のアウフヘーベンは、果して揚棄といふべきであらうか、止揚と稱すべきではあるまいか。これらは、最も正確な意義に従つて一定せられなければならない。

第二に、簡單明瞭であることが必要である。それとともに、これには、正確にして簡明、この兩方の性質が伴ふのでなければ價值がない。正確ではあるが冗長、或は、簡單ではあるが不正確では、何にもならないのである。たとへば、映畫を最初は活動寫眞と云つてゐた。併し、この四字の言葉は相當冗長である。云ひにくい。それで、後には略して活動と云つた。活動を見にゆくと云ひ、又、活動世界、活動俱樂部などといふ雑誌も出た。併しこれもよく考へて見ると、曖昧で不正確な言葉である。なぜなら、一般的な言葉の活動といふのと紛れやすい。それで、それらとは全く

別の映畫といふ語が造られ、一般化するやうにもなつたのであらう。

元來歐米の言葉には長いものが多い。これは原語においては、アクセントを強調して云へばよいので、長いやうに見える言葉でも、實際に發音する場合には、決して長くはなく、殆ど云はなくてもすむ部分もある。併し、それがわが國に入つて來て、わが國民の言葉として、口に上ることになると、國語の性質として、一々明瞭に母音をつけて發音するので、どうしても長くなるから、これを簡明にいふために、略語が使用せられる。ビルデングがビルとなり、アパートメントハウス、デパートメントストアがアパート、デパートとなるのも、この理由からである。これは原語を無視した用ひ方と非難せられるべきでなく、肯定せられてよいのである。パーマネントウェーブのごときも、電髪などと稱するよりは、パーマとでも云つた方が、まだましである。かやうにして、わが國の言葉では、略語が發達し、新語にもこれが多いのは、この簡單明瞭を發揮する性質から出てゐる。ここで問題となるのは、漢字にすがつた漢語を用ひるより、なぜ平易な日本語、つまり大和言葉を用ひないかといふことである。映畫といふ語にしても、わが國には、古くからかけゑ(影繪)のぞきゑ、或はうつしゑなどといふものがあり、かういふ語が使用せられてゐた。その例にならへ

ば、映畫はうごきゑとでも云つてよいのである。所が、うつしゑの方は幻燈といふ語が一般化し、うごきゑなどといふ語は遂に使用せられなかつた。近頃では、紙芝居といふ平易な語の代りに、畫劇といふ名稱が使はれ出した。

かういふ現象は、およそ二つの心理から出てゐる。一つは、さういふ大和言葉は時として冗長に過ぎるからで、大和言葉で意をつくして表出するには、稍長い言葉を使はなければならぬ場合に、出合ふことが多い。ところが、漢字にすがつた漢語を用ひると、漢字が意味を現す言葉であるから、漢字を見ればその意味が直ちにわかり、言葉は簡單ですむ。それゆゑ、新語は結局、漢語を用ひる方が便利であるから、さういふ語が多くなるのである。今一つは、何となく一種の威嚴といふか、莊重といふか、さういふ氣分を持つてゐて、安つぽくない、平俗に聞えない。かやうな感じから紙芝居を畫劇といふ語で置き替へたりするやうにもなるのであらう。紙芝居會社、といふのはをかしいが、畫劇會社なら、をかしくないと感じる。浪花節を浪曲、淨瑠璃を淨曲、浪花節芝居を節劇などといふのも同じ現象である。

併し、實は、この觀念が根本的に誤つてゐるのである。第一に大和言葉で表現せられた語を、卑

俗低劣であるといふやうに考へるのは甚だしい誤である。われわれに親しい昔ながらの純粹の言葉を、尊ぶやうな觀念を造らなければならぬ。第二には、話す言葉だけでは、何のことか意味が通じなくてもよい、漢字を見れば意味がわかるから、それでよい、といふ觀念が、やはり誤であつて、これは漢字にすがつて、日常の話し言葉を無視した考へ方なのである。かやうに文字と話し言葉が分離して、いたづらに漢字が尊重せられるやうな考へ方を是正し、日常の話し言葉を根本として、文字はむしろその従たるもの、少くとも、言葉と文字とは一體となつて、文字だけを獨立させ漢字に依存した觀念の表出などは、是非改められなければならぬのである。これが、前に述べた、實體と分離し、實體を無視した言葉の使用といふ現象とも關聯して來るので、是非この點は、今後改められなければならぬことである。

けれども、この大和言葉、平易な話し言葉を、右の簡單明瞭を尊ぶといふ新語の性質と合はせて考へると、そこには矛盾、背反する現象の起る場合が多いから、自然その間の調節については、大いに考へなければならぬ問題があると思ふ。茲において第三に、新語はなるべく平易な一般的な語である事を必要とし、むづかしく堅苦しい語は避けるべきであるといふ條項を掲げる必要がある。

この條件は、今日まで無視せられることが多かつたが、今後の新しい時代には、是非考慮せられなければならぬことである。

第四に、優美、明朗な感じを與へる語であることを必要とする。いやしくも野卑、低級なものであつてはならない。併し、この點は、前に述べた、言葉の平易化といふことと抵觸するものではない。平易、通俗な言葉であつても、實は優美、明朗でみやびやかな言葉も多いのである。併し一面において、それは卑俗、賤陋に陥る惧れもないわけではないので、このことを常に念頭において、言葉は考へられなければならぬ。新しい言葉の場合には、殊にその必要が強調せられるのである。

このことは又、言葉の趣味的、或は興味的使用といふことにも關聯して來る。一方から云へば、言葉の倫理性とでも云へば云はれるであらうか。第一の條に述べた、言葉が眞であることとともに、又、言葉は常に善、美でなければならぬ。新語はとかくこの點を無視して發生する場合が多い。みだりに、卑賤な興味から現れて來た新語の亂用は、否定せられなければならないのである。意味が深長であるのをイミシンなどといふのは、簡単に省略するといふ理法にはかなつてゐようが、これはいかにも低級卑俗な略語であり、使はれる範圍、部面も興味的な性質のものであるから、かやうな

語の出現は防止しなければならない。

以上のごとくして、新語の無制限な、恣意な亂出に對しては、十分に取捨選擇して、その横行を警戒し、國語の純正を保ち、一面においては、國語の豊富さを失はず、國語の正確さ眞實さ優美さを傷つけないやうにしなければならぬ。殊にジャーナリズムとか興行物などの無責任な新語の製造、輕薄な新語の亂用に對しては、十分に注意を加へる必要がある。これは國語運動の上で實踐せられなければならぬ重要な意義を持つものと思ふ。

國語國字の問題

この頃、國語問題がやかましくなつた。それは國力の發展と國民的自覺との時代にあつては、當然起らなければならない問題である。これと同じやうに、日露戦争の前後においても、國語問題が盛んに取り上げられたものである。私は、その頃の國語問題に關する本を少々買ひ集めて讀んでゐるが、その中でも、明治四十年に出た、堀江秀雄編の「言文一致文範」と題する書は有益な書である。といふのは、この本の名は、いかにも平俗な作文入門書の感を與へるが、その龍頭に、明治三十年代に行はれた諸家の國語問題に關する論文を編纂收載してゐるからで、物集高見、山田美妙、坪井正五郎、菊池大麓、以下、西村茂樹、久米邦武、市村瓊次郎、坪内雄藏などの諸大家にいたるまで、四十二篇が收めてある。

これを通覽すると、言文一致運動に關する議論が最大多數で、當時では、これが中心問題となつてゐたやうであるが、なほ國字の問題にも觸れて、三上參次博士の「國字改良に關する意見」や上

田萬年博士の「新國字論」や田中秀穂氏の「改良國字の効果」などのごとく、漢字制限説、假名を主とする説から、速記文字を新國字として制定する説のごときものまで、種々の新しい論議が出てゐて、三十數年後の今日でも、少しも古いといふ感じがせず、現代の問題としても、甚だ適切なものがある。殊に三上博士の説は、さうである。

たださすがに、言文一致の問題は、當時としては重要な議論の對照となつてゐても、今日では、もうそれが普通の常識となつたのは、そこに時代の進歩が認められる。併し、今日では、現今の普通文體である、所謂言文一致の文章を、更に一層徹底させて、話し言葉を、より深く研究し、文章も、その話し言葉に近づけようといふ考へ方が心ある人々の間には行はれてゐるやうである。

國字問題にいたつては、當時と今日と、四十年に近い數字の距離が、何らの變りも示してゐないといふことは甚だ遺憾である。今日でも、やはり當時と同じ意見を蒸しかへさなければならぬやうな状態では、國字問題の解決は、前途甚だ遠い感じがする。

奇妙なことには、當時は假名遣の議論が殆ど行はれてゐない。この點は、その後、考へ方の餘程進歩してゐることが知られるのである。私は、さうした往時の國語問題の書を顧みながら、なほ現

代の重要な文化問題として、一層深くこれを考へたいと思つてゐる。

ことば談議

すまふのシーズンになるといつも思ふことだが、このすまふといふ言葉に宛てる漢字が氣になる。

すまふといふ言葉には、普通、相撲といふ漢字を宛ててゐるが、一方ではまた角力といふ漢字を用ひる。つまり、すまふといふ一つの言葉に、二通りの漢字を宛てて使つてゐるわけだが、いづれにしても、すまふといふ言葉の意味をとつて宛てた漢字に過ぎないのだから、何とか一方に統一してもらつた方が、都合がいい。

相撲といふ漢字は、すつと昔から使はれてゐて、今日でも一般的なのは、この漢字であるから、歴史の上では、相撲といふ漢字を使ふことにしておいた方がいいわけだが、併し、今日、すまふに關する言葉の中には、むしろ角力といふ漢字に關係のあるものが散見する。たとへば、すまふ社會のことを一般に角界と云つてゐるが、別に相界とも撲界とも云ふことはない。又すまふ取のことを

力士といふが、これも相士とも撲士とも云はない。こんなことを考へて來ると、どうも相撲といふ漢字よりも角力の方を残しておいて、これを一般に用ひることにしてもらつた方が、現在の状態としては都合がいいのではないかと思ふ。

その上、字を書くことからいふと、相撲よりは、角力と書く方が、すつと字の劃が少くて、便利である。それに相撲といふ漢字は、どうかすると、國名の相撲と間違へられることがある。私なども、校正の際に、相撲と書いたのを相撲と組んで來られた經驗に一度ならずぶつかつてゐる。又その逆の場合も多いことであらう。だから、こんなめんだうな漢字よりは、字劃が少くて明瞭な、角力といふ漢字を一般化してもらつた方が、いろいろな點で工合がいいわけである。

角力に似た字で、それよりも少しむづかしい掬力といふ漢字は、早く日本書紀の野見宿禰が當麻蹴速とすまふをとる、歴史上の有名な事件を記した際にも用ひられてゐて、掬は角と同じ字で、日本書紀のある寫本の中には、これを角力とも書いたものがあるが、歴史の上でも一ばん古いのは、やはり角力といふ漢字だつたといふことになる。

このやうに、同じ言葉に對して、二通りの漢字が宛てて用ひられてゐるやうなのが、文字の教育

をも混亂させる原因となるのだから、こんなのは、どちらか一方にきめてもらひたいものである。さうして、私は以上のやうな理由から、むしろ角力といふ漢字の方を一般化した方がいいのではな
いかと思つてゐる。

併しこれはいづれにしても、字を宛てたものに過ぎないから、結局假名で書いた方が賢明なわけだが、すまふといふ言葉に宛てた漢字などは、もう餘程一般化してゐるから、こんなのは漢字で使ふことにしておいてもよからう。

地名なども、漢字で書くよりは、一般に假名書にしてもらつた方が都合がいいものである。山中温泉に行く乗換驛の動橋、あれを、いぶり橋と読むことの出来る人は、さう澤山あるまい。これは動かすことをいぶるといふ方言言葉から出た地名であらうが、こんなのを漢字だけで放り出されると、こちらは大いにまごつく。

東京の地名などでも、やはり、さういふことから變化してしまつたものがある。靖國神社脇の九段上から、市ヶ谷の方へ電車が進行して行つた次の停留場が一口阪である。これを、いもあらひ阪と云ふ人は殆どあるまい。今では、もうすつかりひとくち阪で通つてゐる。

一口と書いていもあらひと讀ませるのは、元來、京都府下、もとの巨椋池（今は水がなくなつてゐる）から流が淀川に注ぐあたりの地名なので、三方は沼で圍まれ、一方にしか入口がなかつたところから一口と書いたのだといふ。芋洗は、文字通りに芋を洗ふため、川岸には多い地名で、東京でも昌平橋の事を、昔は芋洗橋とも云つたらしい。併し、山城のいもあらひが特に名高く、平家物語などにも出てゐて、これに一口といふ漢字が宛てられたものだから、いもあらひを一口と書くことが一般に行はれるやうになつたのである。九段の一口阪も、もとよりいもあらひ阪といふのが本當であるが、これを漢字のまゝ、ひとくち阪といふやうになつたのは、恐らく電車の停留場が出来て後、お上りさんの車掌さんか、市の電氣局あたりのしわざであらう。

萬世橋も、もとは萬代橋と書く方が普通で、もちろん、よろづよばしと訓讀した云ひ方なのだが、これもいつか音讀の名となつてしまつた。明治四十年頃までは、まだよろづよ橋といふ元の名が行はれてゐたが、その後すつかりまんせい橋といふ云ひ方が通り名となつてしまつたのは、これもやはり市電の停留場となつて、車掌さんの呼び聲などが一般化したためではないかと思ふ。

かういふわけだから、地名は假名書にするか、或は漢字に假名で讀み方を添へるやうにしてもら

ひたいものである。少くとも、東京の市電の停留場などでは、御徒町だとか狸穴だとかいふのは、假名書で示す必要がある。でないに、たぬきあなどといふ町の名が出来て来ないとも限らない。尤も、狸穴と書いて、まみあなど假名をつけておけば、地方の人でもまみとは狸のことか分かるから、さうした方が親切であるかも知れぬ。私はかういふ意味で、振假名廢止論には、一圖に追隨することも躊躇してゐるのである。

史 歴 の 典 古

刊社本日ソタモ

¥ 2.00

著 者 藤 田 徳 太 郎

發 行 者 金 原 健 兒

發 行 所 東京市麹町區内幸町大阪ビルモタソ日本社

印 刷 所 東京市芝區愛宕町二丁目十四 愛宕印刷株式會社

配 給 元 東京市神田區淡路町二丁目九 日本出版配給株式會社

昭和六十一年十一月十日印刷
昭和六十一年十一月十四日發行

會員番號 一三五五〇一

一 木 聖 澤 藤 一

菊 寛池著 **新 道** 美観の女主人公歌子、朱實に次から次へとおそひかゝる戀愛の受難はその儘我々自身の問題として實に興味深い。魅力的な小説である。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

菊 寛池著 **戀愛と結婚の書** 人生の禍福を決定する戀愛と結婚のすべての問題に對して慈父の如き温い言葉で明快に答へあやまちなき人生の道を指導した評判の名著。 洋四六版一・三〇 裝郵〇・二〇

菊 寛池著 **日本競馬讀本** 競馬に行く人で、家運を傾けてまで競馬をした人は是非共この一書を座右に置くべきである。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

菊 寛池著 **日本文學案内** 日本文學を各時代を通じて泰西と比較検討し、日本文學の姿を明確に把握した異色ある文學研究書であると同時に青年女子の絶好の教養の書。 洋四六版一・六〇 裝郵〇・二〇

菊 寛池著 **文章讀本** 從來の美文體を排し、人格を反映する身についた文章を獲得する要諦を教へ、文章が人間完成である要旨を徹底させた稀代の名著として名高い。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

菊 寛池著 **新女大學** 女性としての教養・趣味・娛樂・社交・家事・戀愛・結婚を語り、良人・貞操・夫婦讀本と收録した完全な人生案内、新女性道徳書の決定刊。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

菊 寛池著 **話の屑籠(二卷)** 世間は菊池先生が意匠を脱ぎ、裸になつて語る人生觀、社會觀を膝をまじへて日常生活の隨想。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

菊 寛池著 **大衆維新史讀本(上卷)** 日本精神の高揚を叫ばれてゐる今日にも拘らざ歴史が閉却されがちである。日本人は維新の礎石を基いた志士、仁人の名を忘れてはならない。 洋四六版各一・二〇 裝郵〇・一〇

内 田誠著 **緑地帯** 歐洲風の蕭洒な、ウイットとユーモアに満ちた話題は廣く全世界に亘り、知識と趣味の好伴侶として何時までも書架に置きたいものである。 洋四六版二・〇〇 裝郵〇・一〇

三市 祿著 **三祿隨筆** 稀に見る性格の持主たる著者の筆は如實にそれを映して、無類の痛快無比な隨想となる。山中に虎と面しても動じない先生の姿に接し給へ。 洋四六版二・〇〇 裝郵〇・一〇

徳川親著 **江南とところく** 貴族院議員皇軍慰問團の團長として、砲煙の江南戦線をつぶさに觀察、前線の將兵と勞苦を共にして貴重な生々しき體驗を報告して熱誠溢る。 洋四六版一・六〇 裝郵〇・二〇

安林 繁著 **豆腐の滓** 關西實業界の雄が、日本國と大陸をまたにかけ行く盛んに活動をついで居られるが、本書は行く先々でその折々隨想を集めたものである。 洋四六版一・六〇 裝郵〇・二〇

安林 繁著 **柿の蒂** 阿部信行大將が、汪政權承認の任務をおびて南づけて行かれたる時に、携行途申すつと愛讀しつづけて行かれたる書物が、本書であつたのである。 洋四六版一・八〇 裝郵〇・二〇

堂 場郎著 **支那兵はどんな兵器を使つてゐるか** 我國隨一の兵器研究家たる著者は、南京陥落と同時に現地に急行し、敵軍の實力を科學的に檢討。材料豊富に凱旋し、敵の實力を科學的に檢討。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

武野 共著 **印度** 人類史上最も慘酷な扱ひを受けつゝある印度を全世界に訴へる印度三億五千の魂の聲を聞け。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

正杉 己著 **東亞協同體の原理** 東亞建設の大使命遂行の根底に流れる東亞協同體の理念に日本人たるものは幾千度反芻咀嚼し盟主たる國民としての自覺を持つべきである。 洋四六版一・五〇 裝郵〇・二〇

ニイナ・
フエドコガ
島津 忠枝

家 族

事變下の天津英國租界に村を採り白系露人の流
轉の生活を描くどん底以上の名作、しいたげら
れた人生に明るい愛と輝きを與へる大ロマン

洋装 B6判 一・六〇
郵〇・二〇

クララ・
フェイス
森 眞子

バルバラ

世界女流作家集「獨逸篇」逞しき獨逸女流文學
を集めた珠玉篇、ナチスの母胎となつた獨逸女
性の情熱を感じる素晴らしいものばかりである

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

リユシ・
マルドリユス
新庄 嘉音

母と子

世界女流作家集「佛蘭西篇」快活と哀愁が織り
なす美事な繪巻物、生みの母の愛を容れられぬ
薄倅の美少年がサーカスに過す數奇の運命物語

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

ドラツイヤ・
デレツダ
原田 謙次

實義な人々

世界女流作家集「伊太利亞篇」ノールベル賞受賞
者の二十歳の折の作品として世界の視聽を集め
た問題作、繪のやうなサルデーニヤ島の物語り

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

ウイラ・
キヤザ
山屋 三郎

巖の上の影

世界女流作家集「米國篇」米國女流文學の代表
的傑作、パイルバックの「大地」とベストセラ
ーを競つた問題の名篇、フェミニナ賞作品の長篇

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

ゲアジニア・
ウルフ
熱田 正信

植物園

世界女流作家集「英米篇」歐洲の動亂に耐へ兼
ねて自來したウルフの文學的纖細さを充分窺ふ
ことの出来る好短篇、他英米間秀作家の傑作集

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

セルマ・
グレルー
西田 正一

幻の馬車

世界女流作家集「北歐篇」映畫化された幻の馬
車、其の他北歐の好短篇を集めた北歐文學の凱歌

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

ルイーゼ・
フランツ
小口 保樹

秘められた人生

世界女流作家集「獨逸(2)」ナポレオン遠征時代
の統後に投げられた悲劇の綱、構想の雄大さと
全篇に盛り上げる感激陶酔感とは絶對である

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

タミユ・
チャンドラン
新藤 忠枝

我が泰國の日

始めて泰青年に描かれた泰國の生活記録、楽し
く美しい物語であると同時に、こよなき泰國の
傳統、人情、風俗の紹介であると激賞された書

函上 B6判 一・五〇
入製判 一・一五

李 俊著

福徳房

二十餘年間の文學生活を持つ著者のチエホフに
比肩される藝風は實に得がたいものである。本
篇は福徳房、鴉、農軍その他十數篇を収める

函上 B6判 二・〇〇
入製判 一・一五

大 森著

民族禮讚

氏の名筆は廣く社界に知られてゐる。これは氏
が日本民族の向上發展に費せんとして情熱を傾
けた一篇である。民族性の自覺こそ急務なのだ

函上 B6判 一・八〇
入製判 一・一五

大 森著

國土禮讚

民族禮讚に次ぐ國土篇、日本全土の津々浦々を
破踏した著者が日本の美しさを讃え愛郷心を促
がさうとするもので讀物としても楽しい

函上 B6判 一・八〇
入製判 一・一五

916
125

終